

授業探訪

言語系科目・中国語<中国語基礎1・中国語基礎2>

アクティブな学びの実践

ランゲージセンター教育講師 南雲 大悟

はじめに

この1～2年、立教大学の中国語教育に転機が訪れた。特に「アクティブラーニング」という文言での指定はなかったと記憶するが、中国語担当者間における授業運営の共通認識として、一つの目標が掲げられた。それは概ね「教員による解説時間はコンパクトに、学生による実践的な学びに時間を多くとるべし」というものであった。具体的に文法解説に費やす時間の目安も提示され、その後に残る「アクティブな活動のための時間」は個々の裁量でいろいろと創意工夫ができる。

また、春・秋各期末に実施されていた全学共通の中国語統一テストにおいても、出題形式がガラッと変わり、「中国語検定試験」型から「HSK」型へと移行した¹。そのほか、テキスト選定に際しても「いぶこみ（＝異文化コミュニケーションの略称）」と書名に掲げる「コミュニケーション重視」の映像資料付き教材を採用するなど徹底している。

解説の時短の中で

私自身は上述の「解説コンパクトに、アクティブ多め」の方針が渡りに船というか、これまでの自身の授業実践に「お墨付き」が得られたようで嬉々とした。語学の授業なので教師がとうとう何かを話し続けるというのは稀だと思うが、それでも課によっては、重要な文法事項が集中し、順々にテキスト通りの解説を続けようとするれば、学生の集中力を奪い去り、眠気を誘うことも容易である。これらの難所を授業でどう小分けにして提供するか、またやる気にさせる提示方法を編み出して、どのように集中力を持続させるかを検討した結果、「解説をコンパクトにまとめて、その後（解説実施日以降も含む）に行うトレーニングでいくらでも繰り返してフォローすればよい」という考えに至り、なお一層、毎回アクティブな活動のための時間確保を目指した。

私も文法解説にはパワーポイントの使用を3～4年試みたが、PC画面と対峙し、その前に貼り付きがちになることから抜け切れず、現在、語学の授業に関しては「板書派」である。さらに現在は板書に加え、実際の板書のイメージで図示・視覚化に注力したプリントも併せて作っている。これを課ごとに配布し、「解説の時間」+ α の学習フォローの役目を担わせている。（授業後でも手軽に見直せる、自宅学習用の位置付けである。）

文法学習時の教室内の反応や学生の表情、雰囲気を通して、概ね良好と感じてはいたが、授業評価アンケートでも「分かりやすい」という自由記述が意見として複数寄せら

れており、これまでも一定の評価は得られていると考える。

アクティブ事例

これまでに作成した副教材や新たに導入するペアワーク（グループワーク）は常に教室で試しながら、学生の反応を見て修正を加えてきた。今回その中で私自身が常用するものや学生に好評だった「アクティブな活動」を紹介する。

以下、「A 協働学習、B 半期に1度のゲーム要素」をそれぞれ挙げていく。

A. 協働学習

【ペアワーク例1】役割指定①

- ①文法解説が終わり、それに関連する例文を訳出する。
- ②その際、教員が「右側の方が左側の人に訳してあげてください」と座席でくり、担当者指定してしまう。
- ③強制的に1人が解答者で、もう1人が受け手兼評価者となる学習に移行する。（次の機会には教員がまた「左が右に…」と解答者と評価者を逆に指名する）

※文法の説明や練習問題の答え合わせでも使っている。

※「左右」での指定のほか、「大学から家が近いほうの学生が遠い方に」や「誕生日が今日から近いほうが」などアレンジを加える。これはペア活動の始動を半強制的にスムーズにするので、硬い空気の中ではアイスブレイク²的に用いることも可能である。

【ペアワーク例2】役割指定②

- ①暗唱、即時通訳、会話の課題を出した際。
 - ②教員がペアをそれぞれ「コーチ（指導担当）」と「選手（解答担当）」に分ける。
- ※これも上記の例1同様「右座席が選手、左座席がコーチ」などと決定する。
- ③練習時間ではコーチ（指導担当）が選手（解答担当）に対して、課題に係る即時通訳の問題を出したり、中国語で質問したりして、選手（解答担当）を育成してもらう。
 - ④最後、教員が全選手を一人ひとりチェックしていく。もし選手が解答を失敗した場合はコーチ（先の指導育成担当）が逆に教員からのチェックを受ける対象になる。

※コーチングの責任を問うという体。

【グループワーク例1】分担制

- ①教員がその日に学んだ課³に関連する練習課題3種（会話・即時通訳・作文）の範囲を決める。
- ②座席の近い人同士で1チーム（4名～6名）を組み、その中で誰がどの課題を担当するか決める。（担当の決定方法は適性、本人の希望、じゃんけん etc）
- ③自分が与えられた課題を自習したあと、チーム内の仲間に課題してもらい、仕上がりを相互チェックし合う。
- ④教員が机間を巡回し、チーム毎の課題3種の定着状況を確認していくが、間違えた人

がいたら、チャレンジ失敗。教員は次のチームに移動し、このチームは次回また最初からやり直しとなる。

※全員できたら、その日の小テストに1点加点する等ボーナスを最初に提示することがある。

【グループワーク例2】 作文試合（ポイント制のゲーム）

※仮に練習の課題は「作文」で、その出題範囲（計20文）はプリントで配布済みとする。

①列毎に1チーム（10名前後）とする（計4チームができる）。そのうち2人が出題者となり、残りが作文の解答者となる。

②2人の出題者はまずチーム内で解答者のために出題して、特訓をする。

③次に2人の出題者は他の3チームへ赴き、相手チームの解答者に出題をする。相手チームの解答者が作文を誤答するとポイントがゲットでき、自チームの得点に加算される。これを全チームに行い、相手の誤答を招けば、自チームのポイントアップに貢献できる。

④現地に残る解答者は入れ替わりやってくる他チームの出題者の出題に答え続け、正解して自チームのポイント流出を防がなければならない。

※その他、解答者が出題者からポイントを奪えるルールなどもある。

⑤ポイントの数を中間報告、最終報告で発表し順位を決める。

※最後に出題していた学生に対する「作文」の課題を実施し、できなかつたらポイント減少などの制度も取り入れている。

B：半期に1度のゲーム要素（いずれも文法学習のルール定着確認で利用）

【単語カード並べ（ポーカー風）：6人1組くらいで実施】

①名刺印刷用カードに中国語の単語を印刷したものを用意する（50枚程度）

※カード50枚のセットを7～8組準備する。

※単語はそれぞれ人称代名詞、動詞、名詞、副詞、形容詞、（疑問詞・疑問の文末助詞）など、同じカードは2～3枚ずつ有る。

②1人にカード5枚を配る。その中で中国語（動詞述語文がメイン）の単文ができるか確認する。

③5枚全部を使い切って1文できればよいが、合わない場合は1枚～5枚全部まで1回だけ交換ができる。

※親がカードを交換・管理する。

④最後に全員が手札を見せ合い、「5枚の動詞述語文」ほか、多くの枚数を使って、美しい例文ができた者が勝ちとなる。

手役例：

ストレート5枚「我・也・不・吃・肉（私も肉は食べません）」で成立しているが、申告制のため、文法ルールを完全に把握できていない学生はこれを4枚「我・不・吃・肉」+1枚「也があまり」と申告してしまい自分で不利になってしまう。一番弱いのは「我・去・我・他・很」のように「我去。」としか成立しない手役。その他、チームによっ

〈注〉

- 1 「中国語検定試験」とは日本国内で歴史のある、毎回1万人近くが受験する中国語の代表的な資格試験である。出題は主に中国語の発音や語彙の知識、文型や語順の理解など中国語そのものの知識を問う問題や日中・中日の相互対訳能力を測る問題などで構成される。
一方、HSKは中国政府公認の全世界共通で実施されるグレード試験で、コミュニケーション能力測定に特化した内容となっており、試験は問題文を含めすべて中国語であるほか、場面毎の表現や読解を基礎とした言語実践能力をチェックする点に重きが置かれている。
現在、立教大学の統一テストの出題形式はHSKを模したかたちで作問されており、発音表記の知識や語順を問う問題は姿を消し、中国語での会話が成立する組み合わせを選択させたり、図版を見て、どの文や会話が内容とマッチするかなどHSKの出題に即した、言わば中国語の「グローバル基準」に変わっている。
- 2 今日、教育現場でも「アイスブレイク」という言葉が聞かれるようになってきた。これはもともとビジネスの現場でプレゼンや会議における最初の重く硬い雰囲気を和ませる目的だったと思うが、教場でのアクティブラーニングを円滑に進める際にも有用と考える。特に「学生同士の議論」を念頭に置く活動では必要不可欠だろう。語学の授業でも「ペア練習」の始動時にはお互いの緊張感を解き、気軽に練習を始めさせる際に使えないだろうか。
- 3 近々に大きめのテストがあり、それが複数課分の範囲に広がっている場合はそのテスト勉強代わりにはここでの課題もそれに合わせ複数の課に指定することがある。

Syllabus

中国語基礎 1 (春学期)

授業の目標

Course Objectives

中国語の発音と基礎文法を習得し、基礎的なコミュニケーション能力を養うことを目標とする。中国語の表音文字である「ピンイン」の読み方、書き方を学び、同時に簡体字も修得する。

授業の内容

Course Contents

週2回一括履修。全クラスで統一教科書、統一シラバスによって授業を進める。学期中を通して、中国語学習のすべての基礎となる発音の習得を重視する。さらにペアワークを通じての会話練習やリスニング練習などにより基本的なスキルを習得する。

授業計画

Course Schedule

1. 発音 (1) (2) 声調と母音、子音
2. 発音 (3) (4) 鼻音 (-n, -ng)、声調変化
3. 発音 (5) 発音のまとめと復習
4. こんにちは 私は日本人です
5. お名前は？ 姓名の言い方
6. ご出身は？ 指示代名詞、動詞述語文
7. 何を飲みますか？ 疑問詞“要”、反復疑問文
8. おいくつですか？ 年齢の言い方、数詞
9. ～があります 所有と存在、量詞
10. 和食はいかが？ 経験の表し方、形容詞述語文
11. 家を訪ねる 助動詞“要”、主述述語文
12. 写真よりきれい 比較文、前置詞
13. 買い物 助動詞“可以”、動詞の重ね型
14. 入って試す 方向補語、連動文

Syllabus

中国語基礎2 (秋学期)

授業の目標

Course Objectives

標準的かつ正確な発音と、ピンインの読み書きの能力を確実にし、さらに初級レベルの文法を習得し、日常的なコミュニケーション能力を養うことを目標とする。

授業の内容

Course Contents

週2回一括履修。全クラスで統一教科書、統一シラバスによって授業を進める。文法理解のほか、コミュニケーション方法による応答練習やペアワークを通じた会話練習やリスニング練習を行い、スキルの向上をはかる。

授業計画

Course Schedule

1. 道をたずねる 疑問詞“怎么”、前置詞“离、从、往”
2. 地下鉄の駅はどこ? 助動詞“得”、動詞“在”、動作の完了・実現
3. 今日は何月何日? 年月日・曜日、近接未来の表現
4. 家族といっしょに 前置詞“跟”、～しながら
5. もう一か月経った 時刻の言い方、時間量の言い方、禁止表現
6. 料理はできる? 助動詞“会”、結果補語
7. だいじょうぶです “不”と“没”、方位詞
8. カニの季節 助動詞“能”、前置詞“在”
9. 食べられるの? 可能補語、副詞“再”
10. スキーがじょうず 様態補語、程度補語、二重目的語をとる動詞
11. ちょっと頭痛が “有点儿”と“一点儿”、動作の進行
12. 先生に買ったのです “是～的”、使役文“让”、動作の持続“着”
13. 空港まで “把”構文、“被”構文
14. 外に車が来た 存現文、“祝”祈の言葉